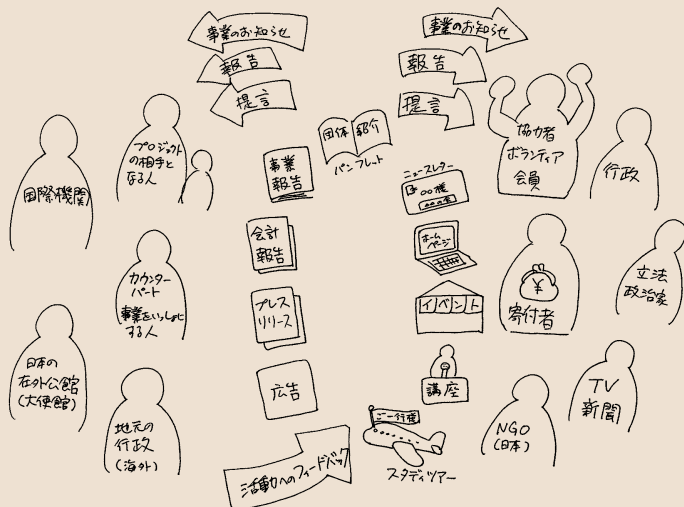


5

沖縄ライブ

2002.02.15/16

5-1【ワークショップ】つながっている？届いている？



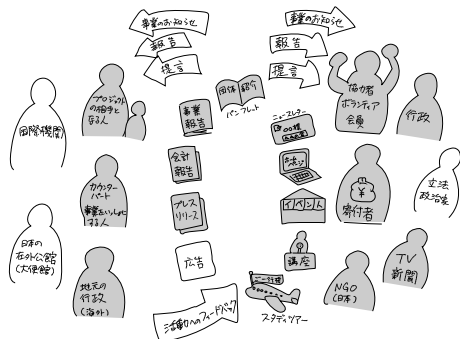
あなたの団体は、どんな広報活動をしていますか。どういう人とつながっていますか。自己評価してみましょう。しっかりつながっていると思うところは灰色に、ほどほどならば茶色に、何もしていなければ白のままに。活動の重点、弱点が浮かび上がってきます。

2002年2月15、16日、沖縄、JICA沖縄国際センターにて、
公開の研究会を開催しました。

NGO研究会のメンバーのほか、沖縄のNGOも参加して、
活動紹介や経験交流を行いました。

ここで紹介するのは、団体の活動を「ぬり絵」で見せながら語る、
というもの。それぞれの団体の特徴、強み、弱みが一目瞭然に。
クレヨンで塗りながら、
うなったり、反省したり、感心したりのひと時でした。

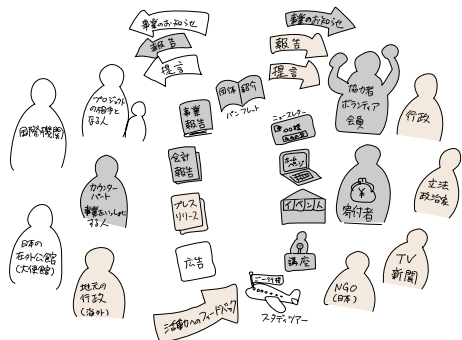
NGO沖縄アジアチャイルドサポート



マスコミには毎月登場

ニュースレターとホームページはしっかり。イベントは3か月に1回。スタディ・ツアーは年に2回。県庁、市役所はほぼ大丈夫。新聞は毎月載っています。他のNGOとのつながりもほぼ大丈夫。事業報告、会計報告は年に1回。広告はなし。プロジェクトの相手である子どもは情報共有できています。向こうの役所とのつながりは、半分くらいですね。

特活・国際協力アカデミーひろしま

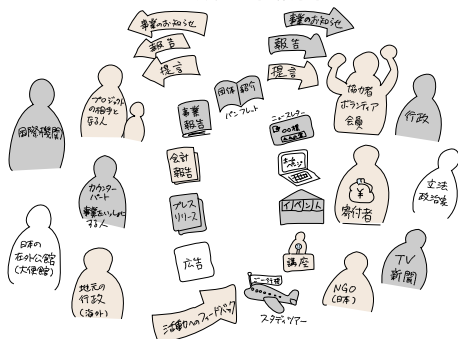


現地の支部から提言を発信

事業報告、提言は現地の支部が発信し、現地の行政にも同様に現地の支部が担当します。私たちはカウンターパートへの報告をしています。国内向けパンフレットはカラー印刷です。弱いのは新聞、テレビ。NGOとの連絡は密接ではありません。それぞれ勝手にやっているというのが広島今の事情です。スタディ・ツアーはやっていません。



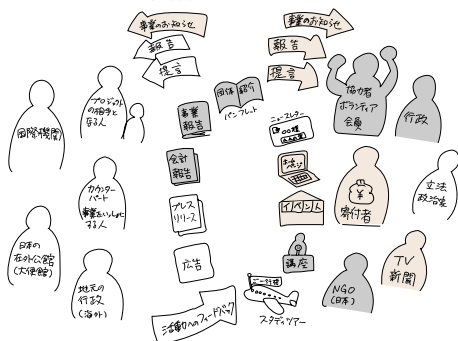
地球環境平和財団



国際機関、自治体、学校と連携

イベント、シンポジウムなど様々な啓発活動や、子供の環境教育など数多くの事業をしています。マスコミ広報にも力を入れています。国連環境計画と連携したり、地方自治体との共催も多く、世界100ヶ国以上の子供たちから毎年環境をテーマに絵を募集しているので学校とも提携。報告・提言も重要です。

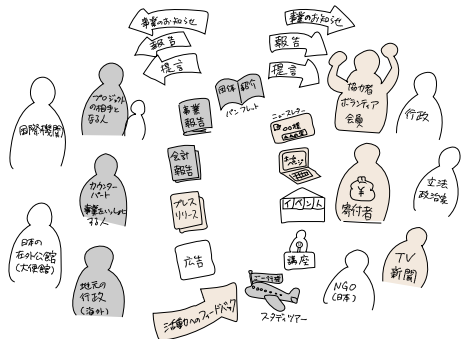
特活・アパナック



NGOの外部監査・会計のセミナーを

NPO作りのお手伝いをする団体です。広報は活動紹介を1回つくっただけ。事業報告は内閣府に会計報告と一緒にやるくらい。人的、資金的余裕がなく最低限のこゝししかできませんが、来年度は“NGOの外部監査や会計セミナー”などNGOの仲間と一緒に地道な活動をしていこうと思っています。

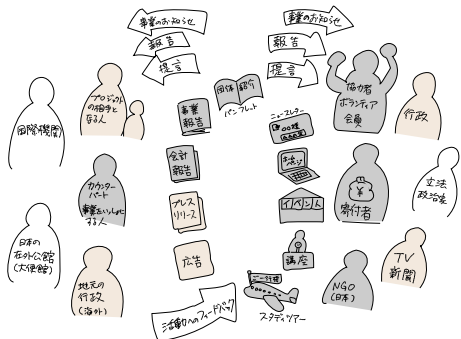
特活・ラブ・グリーン・ジャパン



徹底現場主義。日本への発信は手薄

現場主義の10年でした。情報共有もとにかく現地中心で動いてきました。日本の方はあまり力を入れず、広報もそうです。日本側のスタッフは無給専従。寄付ももっといただきたいのですが、協力者、ボランティア、いずれも不十分です。右半分も塗らないといけなという感じで反省しています。

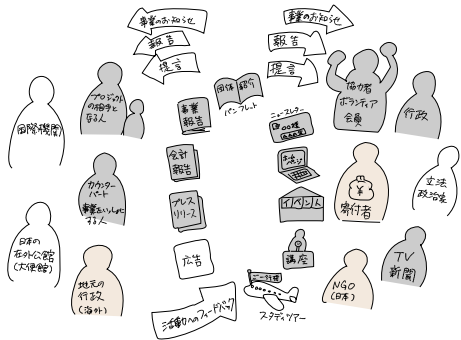
アフリカ日本協議会



活動と広報の重点を変えてきた

会員のほとんどは日本人です。AJFは「アフリカ好きの日本人が集う場」ではないのですが、ここ1年半は、日本国内向けの活動を中心にしてきました。再び、アフリカ向けの発信に力を入れたいと考えています。

NPO法人「飛んで！車いす」の会



NPO法人としての報告の充実を

広報ツールで濃く塗ったのは、スタディ・ツアー、講座、イベント、ニュースレター、パンフレット。若い人たちが参加している部分です。

今、力を入れているのがNPO法人としての会計報告と事業報告の充実。経理ができる人が手伝ってくれるようになったので、来年は塗りつぶせるようにしたいです。塗り絵をしてよくわかりました。大人たちが頑張らなきゃいけないと。

<沖縄のNGOの活動>

青年会議所：GTS（グローバル・トレーニング・スクール）

実務は会員の家族も協力

スタディ・ツアーがメインの活動で、事前・事後研修、報告書作成を行います。団体の運営資金は会費でまかない、実務は協力者、ボランティア、会員とその家族が協力してくれます。地元のNGOとの協力もあります。

県、市、外務省には事業を報告。テレビ番組が作られ、新聞にもよく載ります。ホームページは常時更新しています。

前島アートセンター

アートを通して沖縄の文化発信を

ギャラリーを中心に活動。入場無料で、カンパで賄っています。県とも展覧会を開催。会報は毎月発行、ホームページ、講座を充実させてきましたが、受講者数は、まだ少ない。テレビ、新聞には頻繁に出ます。スポンサーである会員は、それなりの充実感は得られますが、メリットを提供していない感じで、この点を何とかしなければと思っています。

沖縄ポリビア協会

ポリビアに奨学金、沖縄に南米の花

「観光の島、沖縄を南米の美しい花で飾ろう」と種を取り寄せて苗木を育成し、それを売って資金を作り、ポリビアで奨学金を支給しています。双方にプラスになります。苗木と民芸品を売るイベントを年1回、新聞社と共催で行い、育て方の講演会、咲い

た花を楽しむお花見をする所も出てきて、観光に貢献しています。実績が認められ、JICAと寄生虫駆除で小規模パートナー事業を行う予定です。

沖縄ベトナム友好協会

文化、ビジネス、ボランティア

文化と経済の交流をしています。農業視察なども行い、農業訓練場を作ることを構想しています。

行政とのつながりでは、在日ベトナム大使館と懇意にしています。

ビジネス色の強い活動ですが、ベトナムはビジネスの前にまず文化です。ボランティアを通して、そこからビジネスにつなげていくものはないかということを探索しています。

沖縄県フロン回収処理推進協議会

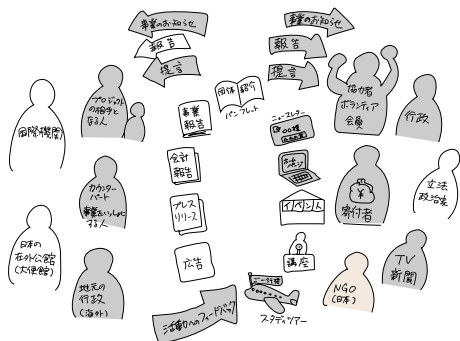
アジアのフロンガス処理を

県内のフロンを処理をしましょうという目的で01年暮れに立ち上がり、活動はこれからで、真っ白です。

年間 150トンのフロンガス処理を読んでいます。

軌道に乗れば、移動式の破壊処理プラントをトラックに積み、アジアへ輸出して、事業もしながら温室効果ガスの抑制につなげていきたいとも考えています。

砂漠植林ボランティア協会

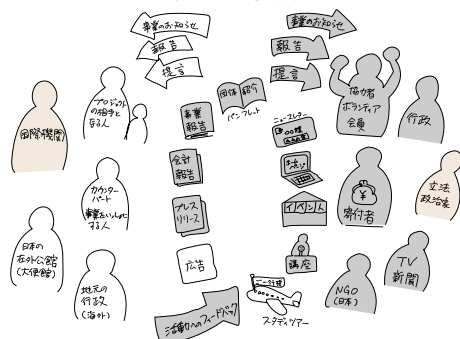


実績にまさる広報なし

乾燥地帯の植林活動は、最初は枯れてしま
うか、住民にたき木にされていましたが、
今は、それはなくなりました。植木が将来
の安定につながると納得したからだと思
います。

報告は資金提供者にはしてきましたが、そ
うでない行政に対してはムダになると考えたの
と、実績をあげればみんなわかってくだ
ると、広報は重視してきませんでした。

関西NGO協議会

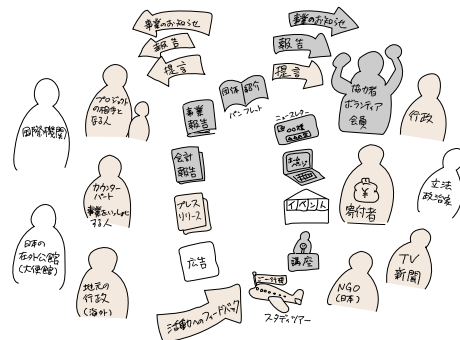


テレビでもの足りないときの情報源

NGOsのNGOなので、多種多様なNGOの情
報や社会問題に関しては、テレビ以外のト
ピックス、提言活動の情報があると市民に
思われています。何か事件があるとHPに
2日間で約1,000件のアクセスがありまし
た。

ネットワークを活用して、国際協力関連の
情報を地域のNGO、他セクター、市民に
発信していきたいと考えています。

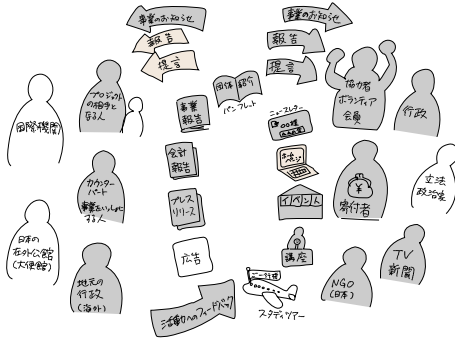
特活・BHNテレコム支援協議会



贅沢品ではないことを伝える苦心

途上国の地域医療に電話を組み入れる活動
を続けています。電話は贅沢品と思われて
きたので、命を救うものだと日本の政府、
企業に一所懸命訴えてきました。事業報告、
活動報告などはかなりやっているつもりで
す。相手国や他のNGOとの連携は、十分
ではありません。広報活動については、思
いの2割か3割ぐらいしかやられていないと
いうのが実態です。

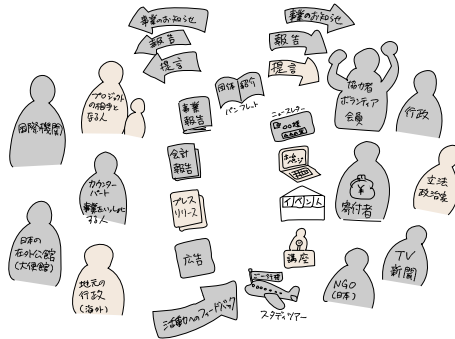
NGO福岡ネットワーク



ネットワーク型の役割

NGOネットワークは、加盟団体の会費で維持しており、加盟団体間における総括的、ネットワーク的連携をとっています。市民やボランティアへの広報、行政へのアピールの代表であり、窓口です。一方、加盟団体の個々のNGOは、活動分野も多様で、広報活動や役割も違いますので、色塗りをすれば、違いがはっきりと浮かび上がってくるでしょう。

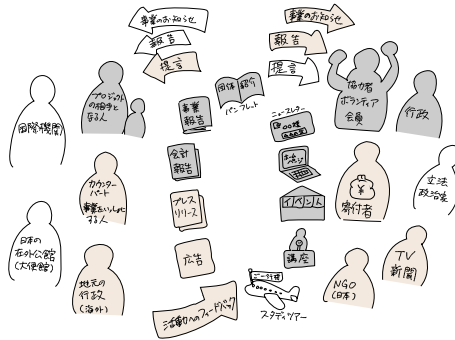
特活・ワールド・ビジョン・ジャパン



提言活動の難しさ

国際会議では子どもの兵士、難民、地雷など積極的に提言活動をし、各国のワールド・ビジョンの事務所と共同で動きます。一方、国内での提言が不十分です。アメリカは行政と立法の役割が明確で、どこのNGOもロビー活動をしています。日本の場合、特定の政党、政治家に色づけされる危惧があります。やらなきゃいかんと思いつつも、なかなか進められない現状があります。

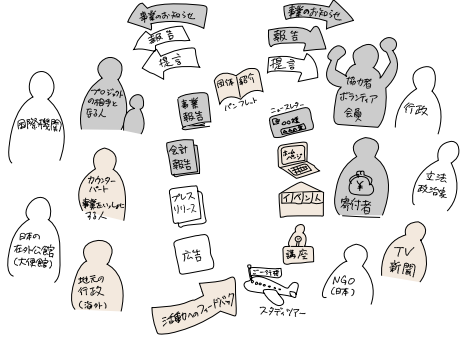
自立のための道具の会



会の個性を広報に反映

相手に対するフィードバックを重要視し、意見交換に時間をとっています。スタディ・ツアーは資金作りを目指したけれど大はずれ。でもやりたい気持ちも。次の世代に伝えることと地域社会も重視しています。ホームページと、ビデオが愛知県で賞をとりました。個性的な活動が広報につながっていると思うので、そこに力を入れていきたいですね。

ASPBラオスの子どもに絵本を送る会

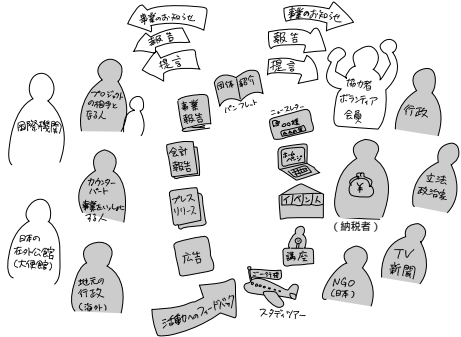


ニーズをどこまで把握

ラオスで本を作り、学校に納めているので、本自体が広報になると思います。ただ、ニーズをどこまで把握できているのかは確信はありません。

ニュースレターは、しっかり読む人もいますけれども、文字が多くて面倒だという人もいるでしょう。支援者とどこまでつながっているか、どんな共感を得ているのか、それを知りたいのですが、なかなか。

ODA (外務省)



説明責任と広報

ODAに対する国民の関心が高まる中で、ODAの実施に関しての国民の見方も非常に厳しくなっています。現在、ODAの基本政策として評価と共に広報の強化が図られています。広報強化の取り組みの中では、「ODA民間モニター」や「ODAタウンミーティング」など国民の幅広い参加が可能となる新たなプログラムも用意されています。

5-2

沖縄、担い手を育てる 広報活動

池間 哲郎

(NGO沖縄アジアチャイルドサポート)

沖縄の歴史は、貧しさを経験し、異民族に支配され、戦争を体験し、そして、今の豊かさや平和を知っている。だからこそ、この島の人々は人を差別しない。痛みを知り、命こそが宝であり、平和がいかに大切かを知っている。途上国の貧しさの中で生きる人々に対して心を向ける、日本国民の中で最も国際協力に適した民族といえる。

沖縄のNGO認識

沖縄でのNGOに対するイメージは、残念ながら非常に悪いといえます。沖縄サミットにおいて過激なNGOなどの反体制的な運動が続発し、沖縄県民の多くがNGO＝反政府との認識が強くなったのは歪めません。まだまだ、NGOという言葉の意味が認識されておらず、NGOが一つの団体と思っている県民が多いのです。

沖縄のマスコミ

沖縄のマスコミは本土に比べると、かなり地域と密着しています。特に新聞がそうで、沖縄タイムスと琉球新報の2紙だけ。NGO活動に協力的で、当団体は約2年半の活動で300件近くの記事を載せていただきました。

テレビ、ラジオなどにも取材（テレビ16件ラジオ18回）を受けました。やはり、かなり協力的です。

新聞、テレビ、ラジオの効果

報道の効果を、新聞と電波とで当団体なりに比較してみました（新聞記事、テレビ、ラジオ報道のあと読者や視聴者からの電話問い合わせの件数で比較）。

新聞記事に対しては、県民から多くの問い合わせがあります。テレビ等の報道による問い合わせはほとんどなく、新聞の反響に比べて1割にも満たないという状況です。

マスコミに取り上げられるために

当団体の中心的な活動であるモンゴルのマンホールチルドレン問題を、沖縄の大衆に訴えるためには、長期的、連続的に報道さ

れることが大切だと判断し、新聞社に対する強いアピールが必要だと考えました。そのため、一過性の活動では継続的に記事に取り上げていただくことは難しいと考え、活動当初からマスコミを意識した連続性のある事業を推進しました。

初めに楽器やおもちゃを贈る運動、次に衣類を送る運動、輸送費捻出のためのコンサート、ゴルフコンペ、モンゴルのNGO職員を招いての講演会、現地で衣類が届いた状況、マンホールチルドレン写真展、マンホールに暮らしていた子どもたちが描いた絵の展示会、保護施設建設の取り組み、保護施設完成の状況、現地団体代表、モンゴルの児童問題に取り組む国会議員を招いての講演会、沖縄の児童とモンゴルの子どもの交流、第2棟目の保護施設の完成など、様々な取り組みを連続して新聞に取り上げていただく努力を積み重ねました。ほぼ、毎週のように新聞社に顔を出し、報道してくれることを頼み続けました。

こうして前述のように約2年半で300件近く、当団体のモンゴル問題が報道されました。毎月、当団体の活動が報道されることにより、かつてはモンゴルのイメージは大草原と遊牧民しかなかった沖縄県民が、現在は小学生でもマンホールチルドレン問題を知るようになりました。それに伴いNGO沖縄の団体名もかなり知られることになりました。

他団体とのタイアップ

他団体と協力関係を築くことは、広報においても非常に重要です。自治体、青年会議所、経済団体、老人クラブ、労働組合などと

もパートナー関係を築き、応援体制を推進しています。青年会議所、自治体などと当団体とが協力することにより、マスコミの取り上げ方も大きくなります。地域や団体、組合、企業などを巻き込んでいくことは非常に重要です。マスコミにとっても、一団体だけを取り上げるのではなく、社会としての取り組みを記事としていることで、ニュースバリューも高くなります。固有の団体の活動だけを頻繁に記事にすると、マスコミに対するクレームも多くなるものです。

学校での取り組み・広報

当団体の基本理念は、モンゴルやカンボジアの子どもたちに対する支援だけではありません。恵まれ過ぎているがゆえに生きることの意味、命の尊さなどを忘れてしまっている日本の沖縄の子どもたちに対する支援を最重要課題としています。それゆえ学校での講演、展示会などを頻繁に行っています。どのような環境であろうとも懸命に生きているモンゴルなどの子どもたちの現状を伝え続けています。これまで、200校近くの学校で講演などを行いました。感想文の数も1万件近くに及びます。多くの子ども達が「自分たちは恵まれている」と書いています。自分たちの恵まれた環境を認識することも大きな教育だと思います。子どもたち自身が国際協力に対して実践、行動したことも、多く記事に取り上げられています。

NGO立ち上げの相談センターに

新たなNGOを形成していく運動にも、当団体は積極的に取り組んでいます。事業

を立ち上げるための情報や専門家の紹介を中心とした相談センター的な活動です。現在、子どもだけのNGO「青い鳥」、婦人団体の「アジア、チャイルド、ビジョン」、おばあちゃんのNGO「モンゴル編物クラブ」などが活動しています。

最大の広報は講演、展示会

当団体の最大の広報活動は、口コミによる草の根活動です。2年半の間に学校、職場、団体、自治体など様々な場所、人数も5名から3,000名近くまでの会場で講演や展示会を行いました。これが最も効果的で波及効果が高い広報であると、断言できます。アジア各地の懸命に生きる子どもたちの現状を、映像などを使いながら自分の口で訴え続けています。会員募集、寄付金、募金のお願いなどは一切、口にしません、多くの方が力を貸してくださる結果となっています。とくに小学生たちの力が大きく、講演のあと、多くの学校（約67%）が募金運動などに発展していきます。団体や自治体なども講演の効果は大きく、「講演を聞いたからNGO沖縄の会員になった」という方が60%を占めています。

団体の規模にもよりますが、最も効果的で重要な広報は、講演会などでの口コミ効果です。現場の状況、体験を真剣に伝えることが人の心を動かすことになるのです。

情報不足の沖縄

沖縄では友好・交流の団体がほとんどで、国際協力・支援をしているNGOは少ないといえます。

組織基盤は脆弱で、代表の自宅に電話を置

き、代表だけが活動している状況です。デスクワーク的な点が非常に弱く、団体を維持運営するための情報、経理、助成金や政府のNGOに対する政策などを学ぶ場所もなく、完全に情報不足です。

JICA・国際センターなどの施設もありますが、「敷居が高すぎて、入れない」との思いを持つ県民がほとんど。まだまだ沖縄に溶け込んでいないというのが現状です。

課題1 NGOが学べる広報を

政府のNGO政策やNGOとしての組織の維持管理、助成金などを学ぶための広報が最も大切だと実感しています。本土の団体との交流も非常に重要課題です。規模の大きさに関わらず、団体としての形態や広報誌などを学ぶためにも県外の団体と連携していくことが大事だと思います。事業の内容にしても愛知の「道具の会」、北海道の「飛んでけ車いすの会」など、誰にでもできる国際協力活動の情報を提供することも必要です。

沖縄のNGOを底上げするためにも、専門家（特にデスクワーク）の要請や本土団体との交流が最重要課題といえます。APICなどの専門機関が沖縄に設置されることを特に強く望みます。政府関係の情報発信源が沖縄に開設されることによる効果は大きいでしょう。

課題2 善意の申し出に応える

多くの沖縄県民からの問い合わせが続いています。その大部分は「自分も何かやりたい。なにか、お手伝いをさせて下さい」ということです。しかしながら、小規模団体

ゆえに何か作業など、日常的に依頼できる業務はありません。現実では、せっかくの善意の申し出をお断りする状況である。何か小さな作業などを手伝ってもらうことにより国際協力の草の根的な普及効果は大きなものがあると思われませんが、断たざるを得ない状況です。善意の申し出を受ける業務などを整備することも大事な課題です。

< 沖縄のNGOの状況 >

1. 会員数

150人以内	23
150～300名	1
300名以上	2

2. 専用事務所の有無

専用事務所無し	24
専用事務所有り	4

9割近くが専用事務所を持たず、持っている」と答えた団体もアパートの一室などを利用している。

3. 事務局員の待遇

非専従無給	23
専従 無給	2
専従有給	1

授産施設の職員が兼任していたり、大学の中にある団体は含まず。

調査した団体の代表すべてが別に職業を持っているか恩給などで収入を得ている。NGOにより収入を得て活動している例は無い。その面でもプロといわれるほどの専

門家や団体は存在しないといえる。

4. 財源

会費のみ	7
助成金のみ	1
寄付金のみ	1
事業割り当て	3
会費その他	14

9割の団体会費など、会員による負担方法。年会費は5,000円以内が多い。予算規模も年間100万円以内がほとんど。

5. 広報誌の発行

発行していない	14
年1回	4
年2回	3
年3回～6回	3
毎月	2

調査団体数・26団体（本土系の大型団体は除く）。

調査：池間哲郎

本土の団体であるAMDA、オイスカ、国際飢餓対策機構、ネパールムスタン地域開発協会などの支部はある程度、活発に活動しているが、沖縄の人々、自らが設立した草の根的な団体の多くは、組織、NGOとしての知識、活動など非常に脆いと言わざるを得ない。とはいえ本土の団体に決して劣らない団体も存在する。

【例1】那覇青果物卸事業協同組合

フィリピンにおける農業指導、生産販売

ミンダナオ島に残された戦争日本人孤児の悲惨な現状から、農業を通じて孤児の職場確保に取り組んだ事業。青果物組合として、ビジネスをからめた国際協力で、現地に雇用を生み、収益を上げ、現地の自立発展に尽力している。

【例2】EM研究機構

途上国での農業指導、土地改良

琉球大学農学部・比嘉教授によって開発された、有用微生物を利用した土壌改良、農業指導技術を、職員が途上国に駐在して指導している。農業資材や健康補助食品などを販売し、国や企業の援助に頼らずに自前の資金で国際協力活動を展開している。

5-3

北と南の学生が 出会って感じたこと

「NGO研究会in沖縄～ 刺激的な人々との出会い」

NPO法人「飛んでけ！車いす」の会

太田こずえ

なんと沖縄の桜はもう散っていて、日中は気温が20度くらいでした。その時、北海道は吹雪が続いていて、雪が2メートルくらい積もっていました。長谷川先生に同行して「飛んでけ！車いす」の会（以下飛んでけ！）の学生メンバーと共に、沖縄で行われたNGO研究会に参加しました。沖縄の学生に会って「飛んでけ！」の紹介しつつ、何か協働で活動をしたい、というのが目的でした。

沖縄のNGOや国際協力活動に興味のある学生が集まって、ビデオやパンフレットなどの資料をもとに、飛んでけ！やNGO沖縄の活動であるモンゴルのチャイルドサポートの話をしました。お互いの活動に興味を持ち、協力して活動するための意見交換をしました。徐々に打ち解けあって、個人の体験談やNGO活動に対する考え方などを話し合いました。

驚いたのは、沖縄の学生が自分の住んでいる地域の歴史や文化、現在の状況を「自分の言葉」で説明してくれたことです。街中に米軍基地があり、基地問題の話も自然と会話の中でできます。私は自分の生まれ育った北海道のことを説明できなかったので、まず北海道の歴史や文化を学習しようと思いました。

すでに北海道と沖縄の文化紹介をしながらの交流をしていくことが決まっています。その後も電話やメールで連絡を取り合い、

ゆるやかに双方の活動を報告し合っています。実際に沖縄の学生がアジアに行くときに、何かできることがあればしていきたい、と連絡がありました。

キーワードは「沖縄ファジー」です。できるときに、できることを、できるかたちで、身近なところから実現していきたいと考えています。

NGO沖縄の池間さんと長谷川先生のご厚意でこのような機会を得ることができました。研究会の方々は若々しくアバンギャルドで、かっこいい大人の方ばかりでした。ここで感謝申し上げます。また、お忙しい中、時間をとって話をしてくれた沖縄の学生の皆さん、ありがとうございました。北海道と沖縄、これから一緒に面白いことやましよう！

NGO研究会 学生の集まりで

NGO沖縄アジアチャイルドサポート研修員
名桜大学大学院 国際文化研究科
仲村 真由美

この2月に北海道の学生と話をする場がありました。沖縄の学生にとって、NGO活動に触れる機会があまりなく、とても刺激的な一日になりました。

彼らの団体は学生が主体となり、自らの出来る範囲で活動し、アイデアを出し合い運営しているのです。我々、沖縄県の学生にとって羨ましい形の学生の集まりが、北海道では始まっていて、とても感動しました。

沖縄にもNGO活動を志す若者も結構いるのですが、行動に移すと「何をすればよいか分からない」と、立ち往生してい

る状況です。でも、この話し合いで感じたことは、我々、沖縄県の学生が「何ができるのかをそれぞれ考えること」でした。

ある学生は、現地に直接出向き、今何が必要なか眼で確かめることが援助のあり方と言っていました。沖縄に居ながら国際協力出来ることもある、事務的なものがしっかりしていてこそ活動が円滑に行くこともあるなど、人それぞれの意見が交わされました。

気負いなどせず、「自分の得意とするもの、好きなことで人々の役に立てば、とても素晴らしいことではないか？」という結果が出ました。

「何が得意か、今、何が出来るか」を考えると、そして、NGOというものを学ぶ場、刺激を与えてくれる人が必要だと感じました。

現在、沖縄県において国際協力、国際ボランティア＝JICAです。

でも、そうではなくて、気軽に足を運べて、NGOを学べ、参加できる場を学生の手で作りたいと感じました。

北海道の学生との出会いが沖縄県の学生にとって貴重な場になり、近い将来、日本の北と南、そして、世界のネットワークを活かして何か一つのことが出来ればいいなあと感じました。今回、NGO研究会が沖縄で開かれたことは、NGO活動に興味のある学生にとっても貴重な場になりました。このような場を開いていただいたNGO研究会の皆様、刺激をくれた北海道の学生の方々に感謝し、これからの活動に役立てていきたいと思えます。